整理室公開事業・埋蔵文化財整理調査成果中間報告会

あの遺跡は今！

PART 19

『古代の知恵と技』

★博物館展示室の入館についてのご案内★
この資料を博物館チケット売場でご提示いただきますと、団体料金でご観覧いただけます。【2014.8.3のみ】

平成26年8月3日(日)

公益財団法人滋賀県文化財保護協会
滋賀県立安土城考古博物館
滋賀県教育委員会

整理調査成果報告会について

公益財団法人滋賀県文化財保護協会は、県内各地の埋蔵文化財の発掘・整理調査を行っています。発掘調査で得られた情報は、「現地説明会」や「新聞やテレビの報道」などを通じていち早く公表しています。また、滋賀県立安土城考古博物館内にある調査整理課では、整理調査の成果についてより深くご理解いただけるように、整理調査報告会「あの遺跡は今！」を平成17年度から毎年２回実施しています。「あの遺跡は今！」では、新たな資料や成果を積極的に公開・展示するとともに、出土品に直接触れていただく整理作業体験などを行っています。

今回は、メインテーマを『古代の知恵と技』とし、発掘調査で出土した資料を通じて、当時の人々の生活や技術をすこしでもお伝えすることができればと思い、出土遺物の展示と関連遺跡の調査報告会を企画いたしました。

この企画が、滋賀の歴史を体感し、文化財への興味と親しみをお持ちいただくきっかけになればさいわいです。

目 次

◇ごあいさつ／目次

◇関連年表(1)

◇展示解説　「１万年前の狩猟場か?!—石槍の発見—」松原内湖遺跡(2)

◇展示解説　「石器時代の石の道具あれこれ」太子遺跡(3)

◇成果報告・展示解説　「古墳時代の玉作り—管玉の製作技術—」金森西遺跡(4～7)

◇成果報告・展示解説　「中国北方オルドス地方様式の短剣を制作する」上御殿遺跡(8～9)

◇展示解説　「ガラス玉と木製盤—古墳時代の様々な技術—」上御殿遺跡(10)

◇展示解説　「みえてきた謎の古代寺院」安養寺遺跡(11)

◇展示解説　「神社遺物にみる平安時代の信仰と技」塩津港遺跡(12)

◇展示解説　「戦国時代の金工技術」関津・関津城遺跡(13)

報告会

時間：午後1時00分～午後2時30分（開場：午後12時30分）

場所：博物館2階セミナールーム　　あいさつ　：午後1時00分

成果報告1：午後1時05分～

成果報告2：午後1時50分～

関連年表

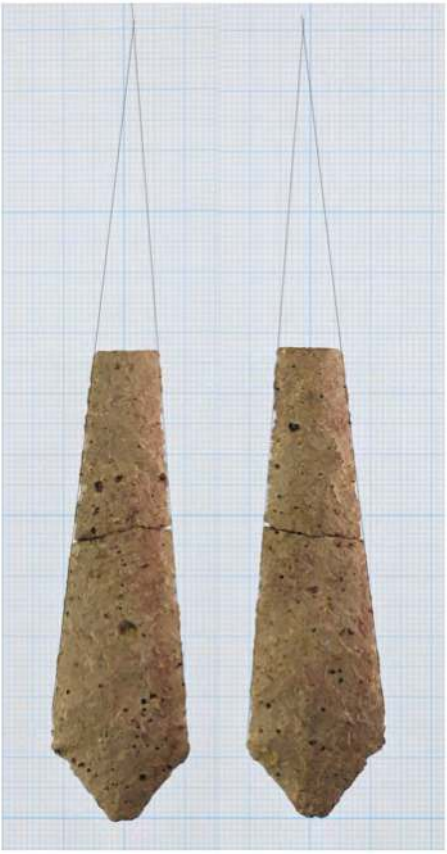
時代	主な出来事	今回取り扱う遺跡とその時期
旧石器 B.C.11000	土器の発明	松原内湖遺跡
B.C.10000	相谷熊原遺跡にムラ？ができる	
B.C.9000		
B.C.8000		
縄文 B.C.7000	粟津湖底遺跡で人々が暮らしを営み始める	
B.C.6000		
B.C.5000	石山貝塚が営まれる	
B.C.4000		
B.C.3000		
B.C.2000		
B.C.1000		
弥生 1	今から約 2500 年前 稲作始まる	松原内湖遺跡
200 弥生	248 年頃 卑弥呼死す	
300 古墳	…前方後円墳が各地にさかんに築造される	太子遺跡
400		金森西遺跡
500	…群集墳が盛行する	上御殿遺跡
600 飛鳥	604 年 憲法十七条の制定 645 年 大化の改新（乙巳の変）	
700 奈良	667 年 近江大津宮に遷都 710 年 平城京に遷都	安養寺遺跡
800 平安	742 年 紫香楽宮を造る 794 年 平安京に遷都	
900	805 年 最澄帰朝し、天台宗を伝える	塩津港遺跡
1000	11 世紀初め 紫式部「源氏物語」完成	
1100	1167 年 平清盛、太政大臣となる	
1200 鎌倉	1192 年 源頼朝が征夷大将軍となる	松原内湖遺跡
1300	1338 年 足利尊氏が征夷大将軍となり、室町幕府を開く	
1400 室町	1467 ～ 77 年 応仁・文明の大乱	太子遺跡
1500 戦国	1573 年 足利義昭追放（室町幕府滅亡）	関津・関津城遺跡
安土桃山	1576 年 織田信長、安土城に入る	
1600 江戸	1603 年 徳川家康、将軍となり、江戸幕府を開く	
1700		
1800		
明治 1900	1868 年 明治維新	
大正		
昭和	1998 年第 18 回冬期オリンピック、長野で開催	
平成 2000		

1万年前の狩猟場か?!
—石槍の発見—

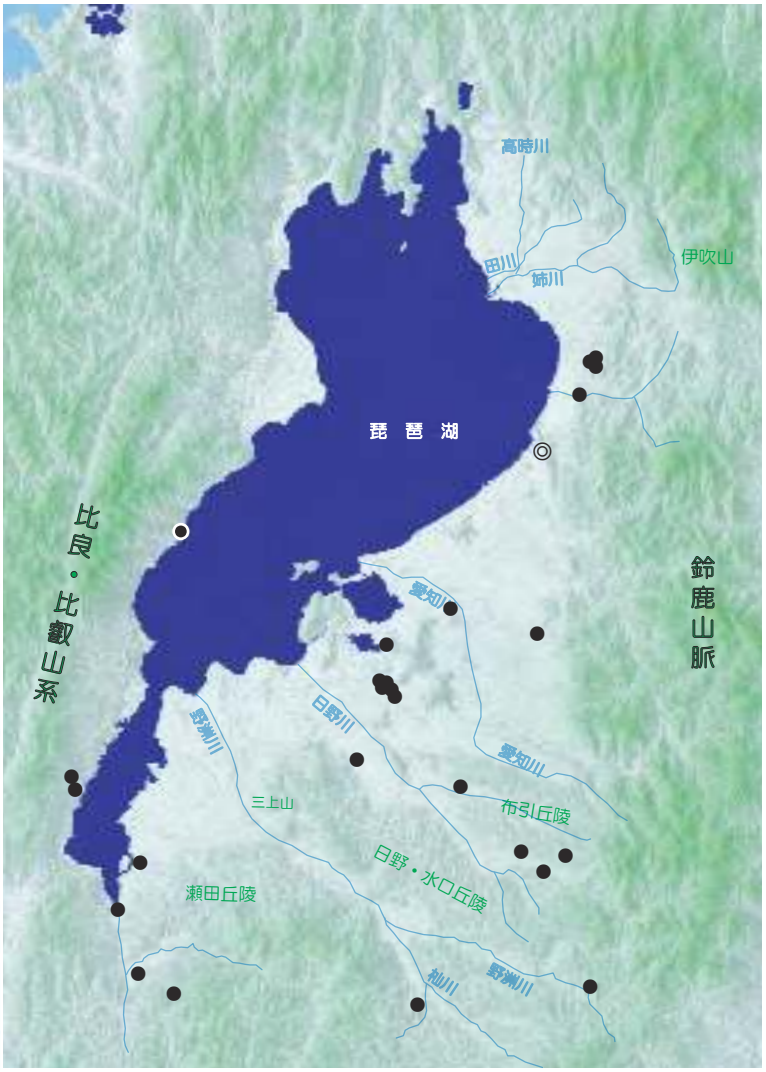
松原内湖遺跡（彦根市松原町）

松原内湖遺跡では、これまでにも縄文時代早期に遡る可能性のある集石土坑や、縄文時代後期の丸木舟など、6,000 ～ 3,000 年前の生活の痕跡が見つかっています。平成 24 年度に行われた発掘調査では、それをさらに遡る古い資料が見つかりました。

有舌尖頭器という、今から約 1 万年ぐらい前、縄文時代草創期に、槍の先に装着して用いられた石器です。県内でも 30 例近く見つかっていますが、基本的にはチャートと呼ばれるガラス質の強い、より細かい加工の可能な石材で作られることが一般的です。しかし、今回見つかった有舌尖頭器は、凝灰岩質の石材を用いて作られていました。この石材、細かい加工を施すには不向きな石材なのですが、これまで県内で見つかっている有舌尖頭器の中でも、復元長が最も長く 13 cmを測り、しかも非常に丁寧に作られています。



出土した有舌尖頭器



滋賀県の有舌尖頭器出土地（◎が松原内湖遺跡）

石器時代の石の道具 あれこれ

太子（たいし）遺跡（大津市太子町）

平成25年度に実施した、太子遺跡の発掘調査では、古代から中世の建物跡などが見つかりました。隣接する関津（せきのつ）遺跡では、田原道（たわらみち）と考えられる古代の道跡がみつかったり、おそらくその道を行き来したであろう、都色の強い遺物などが多数見つかっています。しかし、今回ご紹介するのは、それらの時期の遺物ではありません。実は発掘調査を進める中で、非常に断片的ではありますが、遺物包含層（いぶつほうがんそう）から石鏃（せきぞく）（矢じり）や磨石（すりいし）、磨製石斧（ませいせきふ）など、石器時代に遡る資料もいくつか見つかっています。

石器資料、中でも縄文時代や弥生時代の石器は、残念ながら現在の研究では、共伴する土器からその時期を判断することが一般的とされています。ですから、遺物包含層から出土したこれらの石器の時期を、厳密に決めることはできません。ただし、石鏃の作り方やその形態などの特徴からは、概ね縄文時代後半～弥生時代のいずれかの時期の所産である可能性は考えられそうです。

また興味深いのは、石鏃などだけではなく、剥片（はくへん）や石核（せきかく）（写真下）も見つかっている点です。剥片や石核は、いずれも石器を作る際に生じる、いわば「ゴミ」であり、その出土地もしくはその周辺で石器が作られたことを示す資料です。これらの剥片・石核類が、石鏃と同様に遺物包含層から出土していることから、太子遺跡周辺が、当時、石鏃や磨石を使うだけの場所ではなく、石器も作ったりするような、そんな生活が営まれた空間だったことを物語っています。

サヌカイト製石鏃

頁岩（けつがん）製磨製石斧

砂岩製磨石

サヌカイト製剥片・石核類

古墳時代の玉作り

―管玉の製作技術―

金森西遺跡（守山市金森町）

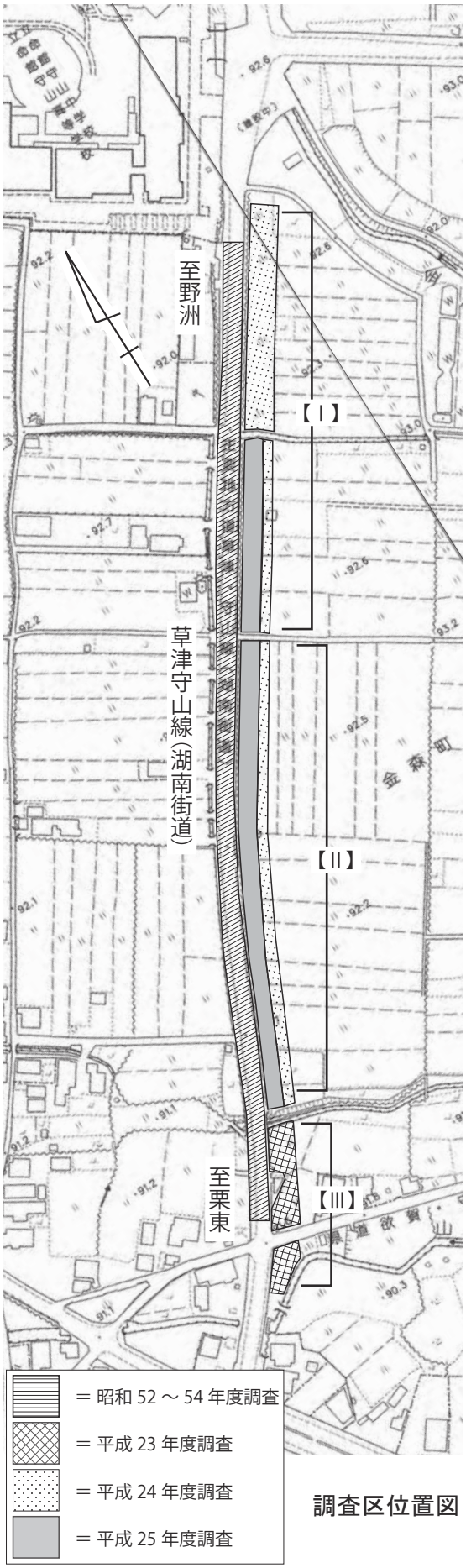
推定 玉作り集落中心地

平成 23 ～ 25 年度にかけて実施した金森西遺跡の発掘調査では、古墳時代前期（４世紀頃）を中心とする竪穴住居や掘立柱建物からなる集落跡が見つかりました。これらの集落のまわりには、網の目のように流れる幾条もの小河川があり、その中からは多量の土器などが出土しています。今回の一連の調査で注目される成果として、40m程度の限定された範囲から、完成品だけでなく製作途中品（未製品）や失敗品などの玉作りに関わる遺物が数多く出土したことがあげられます。

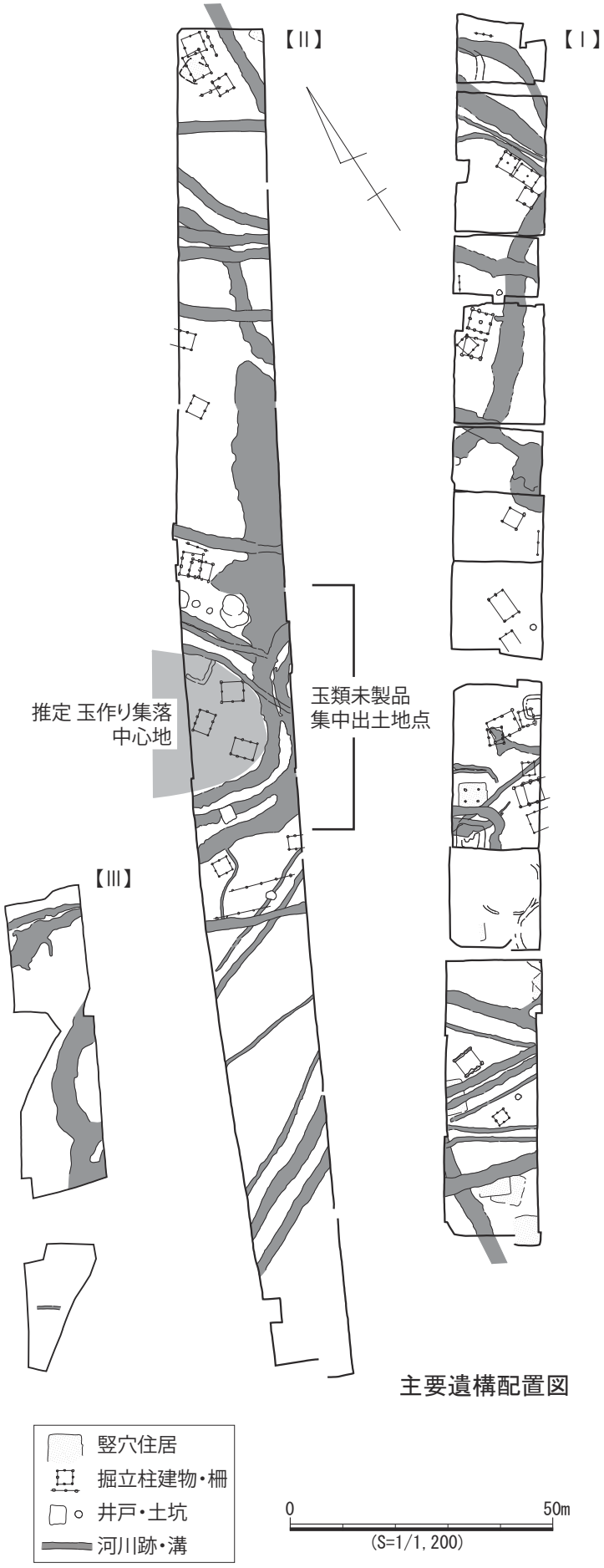
金森西遺跡で玉作りを行っている石材の種類は、「緑色凝灰岩」と「滑石」の２種類に分類されます。緑色凝灰岩は日本海沿岸地域で産出され、滋賀県内では産出が確認されていません。緑色凝灰岩製品は、山陰地方や北陸地方がその一大生産地として知られています。一方、滑石製品は古墳時代前期以降の野洲・栗太郡を中心とする湖南地域ではさかんに製作され、多くの遺跡で製作が確認されています。

また、緑色凝灰岩製品に関連する遺物は管玉のみであるのに対して、滑石製品は複数の製品が確認されています。製品は有孔円板、管玉、臼玉、勾玉、剣形、刀子形、紡錘車などが出土していますが、緑色凝灰岩と比較すると未製品はわずかで、有孔円板、管玉、臼玉が作られていたようです。これらの玉類の完成品は調査区全域から出土していますが、特に緑色凝灰岩製品が作られていた範囲は絞りこむことができます（右上写真）。今回の調査では後世の削平のため、工房などの玉作りに直接関係する遺構は検出できませんでした。しかし、この周囲の小河川や土坑から緑色凝灰岩の剥片やチップ、未製品などが散らばって出土していることから、この付近に工房が存在していた可能性が非常に高いと考えられます。

緑色凝灰岩製の管玉は、製作工程の各段階の石材が出土しているため、技術の復元が可能です。滑石製品については製作途中品の出土量が少ないものの、管玉は緑色凝灰岩製のものと技術の比較をすることができます。



調査区位置図



主要遺構配置図

【緑色凝灰岩製品】

前述のとおり管玉に関わる遺物が出土しています。緑色凝灰岩の原石も数点が出土していますが、その量の少なさや、わずかに出土した原石も純度が低いことから、ある程度粗割された状態の石材が持ち込まれていたと推測されます。最も大きな剥片でも消しゴム大くらいの大きさのものしかなく、管玉が作れるサイズの剥片は可能な限り加工を試みています。剥片には石材を打ち欠いたときにみられる波紋状の打割面が観察できるものもあります。これらの剥片は形割されたのち、形割した面には手を加えず、1～2面を打裂により角柱状の完成品を想定したサイズに近づけます。今回の調査で出土している完成品は、長さ1.5～2cm、直径4mm程度のものが多く、角柱状の未製品のサイズもこの大きさに揃ってきます。その後、研磨・穿孔を行い仕上げますが、 多角柱状で欠けてしまったものや孔の位置がずれた失敗品もみられます。穿孔は目印を付けたものもあり、いずれも両面から行っていたようです。

【滑石製品（管玉）】

滑石製の管玉は、緑色凝灰岩製の管玉とは製作工程や技術がやや異なっていることがわかります。滑石の剥片は出土していませんが、全面を打裂により完成品のサイズに近づけ、そこから研磨により四角柱状に成形します。その後さらに研磨を行い、完成品に近い円柱状になった段階で穿孔しています。

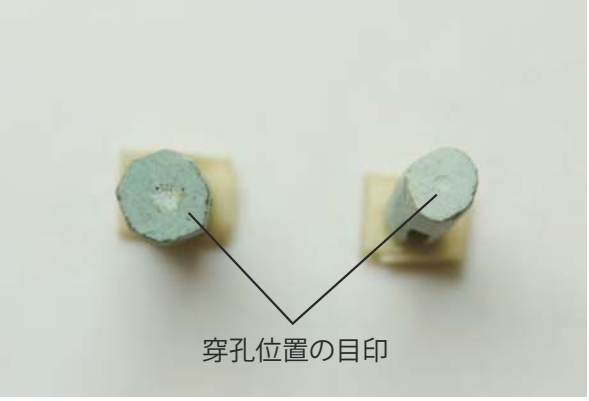
このように同じ管玉でも製作手法が異なることから、同一の工人が素材を変えて玉作りを行ったとは考え難く、緑色凝灰岩の玉作りと滑石の玉作りは別々の工人が行っている可能性がでてきました。

緑色凝灰岩製の管玉関連石材

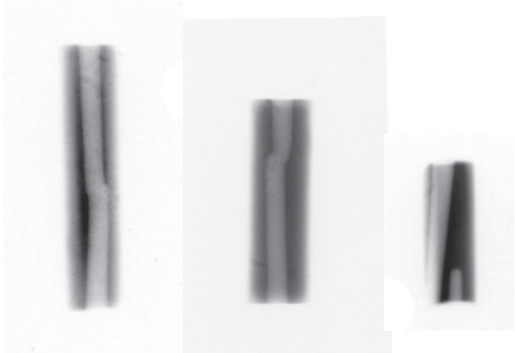
滑石製品

滑石製品の未製品

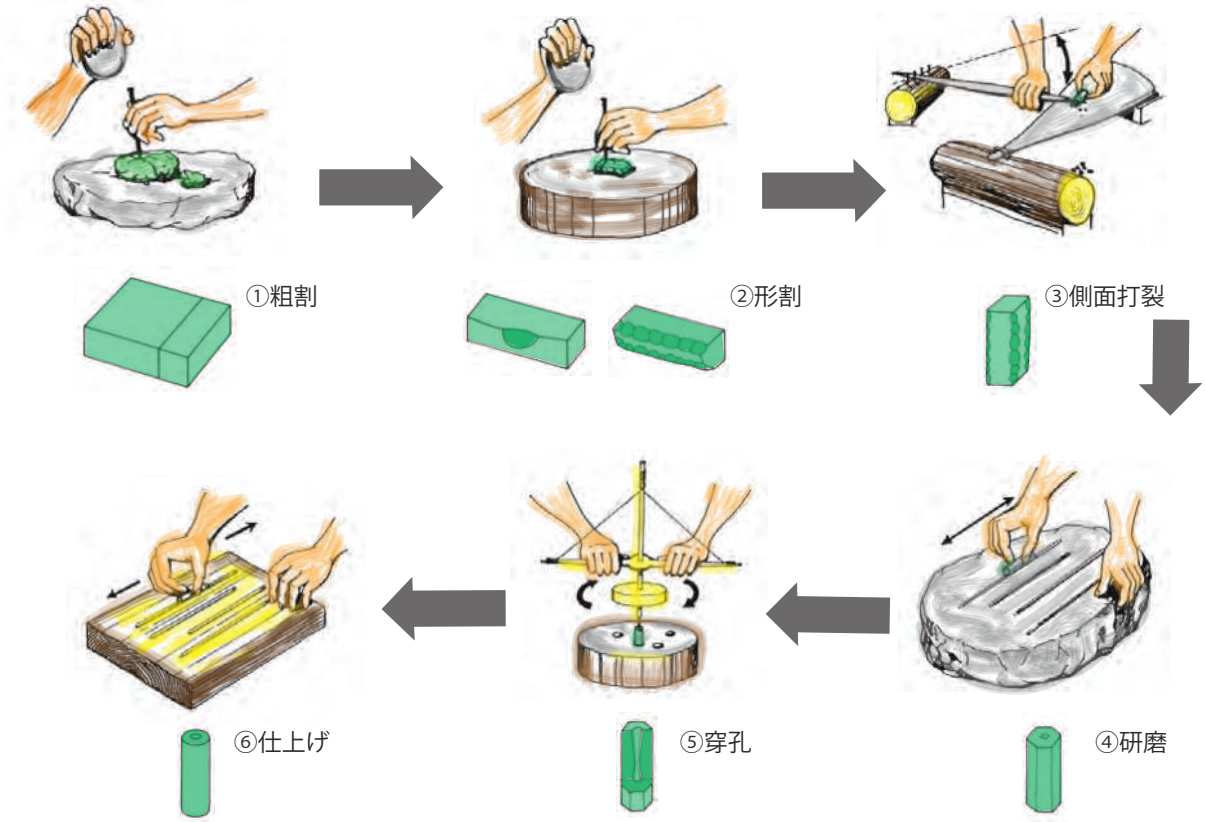
【緑色凝灰岩製の管玉関連遺物に残る加工の痕跡】



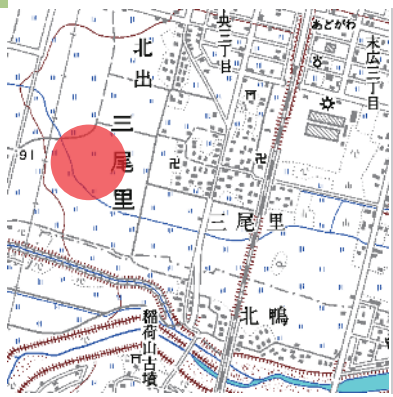
（※左右ともに同じ個体）



X線写真：両面から穿孔したことがわかる
右は穿孔時に孔の位置がずれた失敗品



古墳時代の緑色凝灰岩製管玉製作工程模式図（福井県立博物館 1988 を改変）



中国北方オルドス地方様式の短剣を制作する

上御殿（かみごてん）遺跡（高島市安曇川町三尾里）

出土した鋳型

平成 23 年の夏、 高島市の上御殿遺跡から短剣の鋳型が出土しました。 中国東北部オルドス地方に見られる短剣に似ているところから注目を浴びているものです。

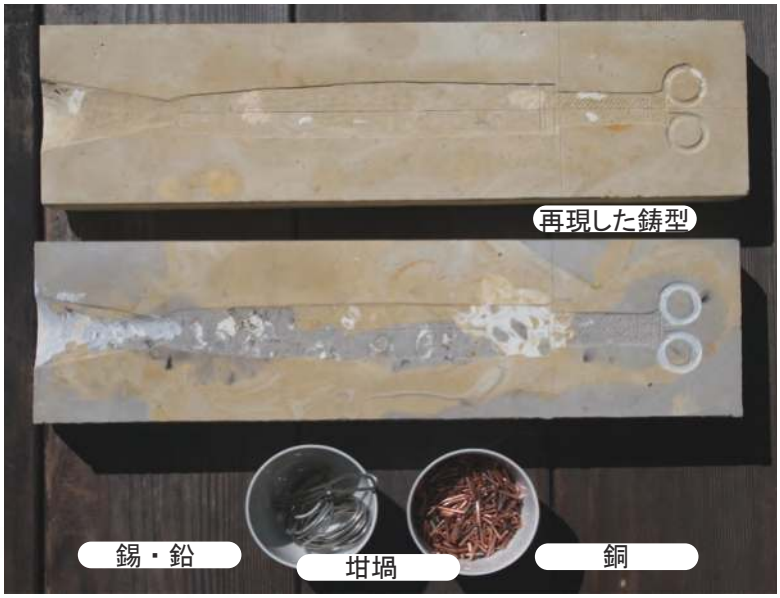
この短剣がどんなものであったのか、 鋳型を作成し実際に鋳造してみました。

1）鋳型を作る

出土した鋳型はシルト岩製です。 砥石の材料となる石ですが、 手近に探すことができなかったので、 今回は石膏に細かい砂を入れたもので代用しました。

長さ 40 cm程のブロックを 2 つ作り、 出土品と同じようにノミで掘り込みました。

出土品で欠損している刃先のほうに湯口を設けました。



2）青銅を溶かす

出土品は青銅製品の鋳型と考え青銅で再現しました。銅80%、錫（すず）10%、 鉛10%(錫50/ 鉛50 のハンダを使用) の合金です。

合金となった青銅は700℃程度で溶けるのですが、 原料の銅は融点1084℃です。 この温度まで上昇させるため今回はドライヤーを2基使用しました。

耐火レンガ積木炭燃料電動送風式炉

3）湯を流す

溶けた青銅を一気に流し込みます。

製品の長さが30㎝ほどあり、しかも薄いため、途中で湯切れし空洞ができてしまう可能性が高い製品です。

青銅を溶かす

4）製品

厚さ3ミリに満たない薄いものであるため、脆弱（ぜいじゃく）な剣との予想がありましたが、しっかりとした硬質観のある短剣が鋳上がりました。

毛彫りの細かい模様も湯が流れ込み表現できています。

予想通り、湯切れが何カ所も発生し完全に鋳込まれた製品は作ることができませんでした。比較的穴の少ないものを補修して製品としました。

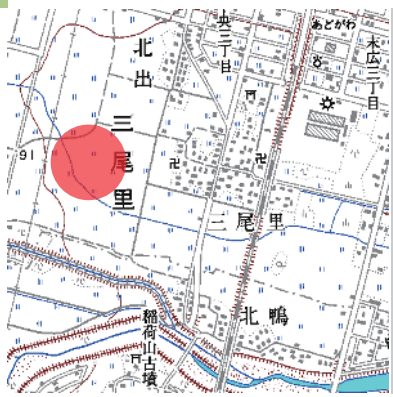
鋳型に流し込む

出土品と同じ石製の鋳型とした場合、綺麗に鋳込めた可能性は高いです。

次回に期待です。

失敗品の数々

鋳上がった
オルドス風短剣



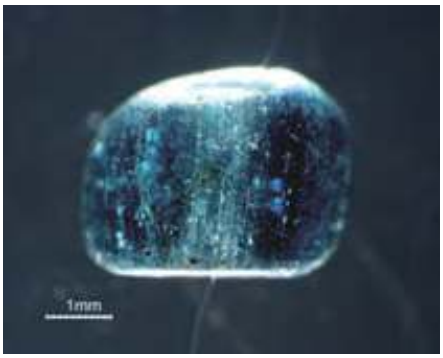
ガラス玉と木製盤
―古墳時代の様々な技術―

上御殿（かみごてん）遺跡（高島市安曇川町三尾里）

上御殿遺跡では、これまでに、弥生時代末から室町時代まで連綿と続く川跡と祭祀の跡、古墳時代から平安時代までの建物、古墳などとともに、国内には類例のない短剣の鋳型（８ページ参照）、腕輪形石製品、斎串・人形・馬形等の木製祭祀具など、さまざまな遺物が出土しています。今回紹介するのは古墳時代のもので、木棺墓からみつかったガラス製小玉と、川跡から見つかった木製盤です。

◇ガラス製小玉

80 個程がまとまって出土しており、被葬者である地域有力者が身につけていた首飾りと考えられます。写真のものは直径約４㎜、美しい青色で、光が当たるとより鮮やかさを増します。穴に平行する細長い気泡が確認でき、パイプ状にしたガラスを細く引き伸ばした後、長さ３㎜くらいに切断してつくったことがわかります。日本にガラスがもたらされたのは弥生時代以降ですが、国内生産が始まったのは奈良時代頃からで、それ以前は海外から製品を輸入したか、再加工したと考えられています。貴重で美しいガラス製品は、装飾品であるとともに威信具としての性格を持つものでした。



ガラス小玉（顕微鏡写真）

◇木製盤

長さ 50 ㎝以上もある大型の容器です。木製容器には、ロクロで挽く挽物、ホゾとホゾ穴を組み合わせてつくる指物、薄い板を曲げて樹皮でとじる曲物など、時期によって多様な製品がありますが、この盤は手斧などの工具で刳り抜いてつくった刳物です。刳物の技術もさることながら、当時はこれだけの大きさのものがつくれる大木が容易に入手できたことがわかります。

木製盤

みえてきた謎の古代寺院

安養寺（あんようじ）遺跡（近江八幡市安養寺町）

安養寺遺跡では広い範囲に瓦や礎石が分布しており、早くから古代寺院跡の存在が推定されていましたが、その詳細は不明でした。大正 11 年（1922）刊行の『近江蒲生郡志』は、塔の心柱の礎石について記しています。これは３ｍ×1.8ｍのサイズで直径約１ｍの柱座を彫りこんだ巨大なものですが、現在その所在はわかりません。

平成 25 ～ 26 年度に、国の重要文化財に指定されている石造五重塔の南西側を発掘調査したところ、礎石やたくさんの古瓦が出土しました。

礎石には直径約 60 ㎝の柱座が彫り出されています。最近、滋賀県立安土城考古博物館の敷地内（博物館裏手の土蔵ふう収蔵庫の前）に移されましたので、この機会にぜひご覧ください。軒先に葺く軒瓦は数種類のものが出土しています。軒丸瓦には蓮華文（れんげもん）、軒平瓦には唐草文（からくさもん）をつけており、７世紀後半～８世紀のものが主体です。奈良時代、この地に居住していた有力氏族が一族の氏寺として建立したのでしょう。

遺物の出土状況からすれば、今回の発掘調査地の近くに寺院の中枢部が存在する可能性が高いと考えられます。

蓮華文軒丸瓦

唐草文軒平瓦

唐草文軒平瓦

神社遺物にみる 平安時代の信仰と技

塩津港遺跡（長浜市西浅井町塩津浜）

琵琶湖の最北端、最も日本海に近い塩津は、鉄道が物流手段となるまでは、京の都から、そして北陸から、多くの物資が行き交う要の港街でした。平成18年にはじまった発掘調査では、この港の湖に面した地に、およそ 130 年間にわたって続いた平安時代の神社跡とともに、当時の信仰の様子をいきいきと伝えるさまざまな遺物が見つかりました。

神社跡から見つかった遺物には、特殊で精巧なつくりのものが多くあります。御神体と考えられる男女の神像のほか、御堂など建物の装飾に用いられていた木製・金属製の装飾品、神への誓いを記した起請文木簡、幣串（御幣）・松明・しめ縄などがあります。今回紹介するのは、神像、”祓え”と”まじない”の道具、起請文木簡です。神社ならではの遺物に当時の信仰と技をみることができます。

◇神像　神社の周囲の堀から合計５体が出土しました。高さ 15 cmほどの小型の木彫像で、男神と女神が区別してつくられています。通常、神像は仏像と異なり、人目に触れない場所に大切に安置され、神官でさえ拝することが難しいとされています。急な地震や津波という大災害により、神像を救出できなかったようです。

◇”祓え”と”まじない”の道具　幣串・しめ縄・土師器皿・松明がセットで見つかりました。『春日権現験記絵図』にはこれらをそっくり使った祓の様子が描かれています。ほかにも、まじないの符合が書かれた土師器皿や、お供えと思われる炭化した穀物などがみつかっています。

◇起請文木簡　300 点以上出土しており、港に近いことから積荷に関する内容が多いのが特徴です。起請文木簡の多くには刀傷が確認できます。役目を終えて、神様との契約を終了する印として入れたと考えられます。

←まじないの符合が書かれた土師器皿

戦国時代の金工技術

関津（せきのつ）・関津城（せきのつじょう）遺跡（大津市関津）

関津城遺跡は室町（戦国）時代の城跡で、尾根の頂上を含む３箇所に土塁で囲まれた曲輪（くるわ）が確認されています。

今回紹介するのは、関津城で使用されていた調度品（ちょうどひん）です。調度品とは、建物の中で日常的に使用される家具などのことで、それらに使われていた金具が発掘調査で見つかっています。

押縁（おしぶち）は屏風（びょうぶ）の縁（へり）を押さえる銅製の飾金具で、5カ所に五三桐文を配し、その隙間を魚々子（ななこ）で埋めています。魚々子は、先端の凹んだ鏨（たがね）（金工用の鑿（のみ））で表面に細かな点々を打ち付けて文様とします。細かく根気のいる作業です。

押縁の文様（拡大）

銅製蝶番（ちょうつがい）は、調度品の開閉のために取り付けられた金具です。現在の蝶番とは形が違って丸く装飾的です。

蝶番

亀形銅製品は、楕円形に十字の胴体部分から亀の手足が表現されているもので、胴部の端に直角に立っている棒状の突起は、頭部をつけるためのものと考えられます。

亀形銅製品

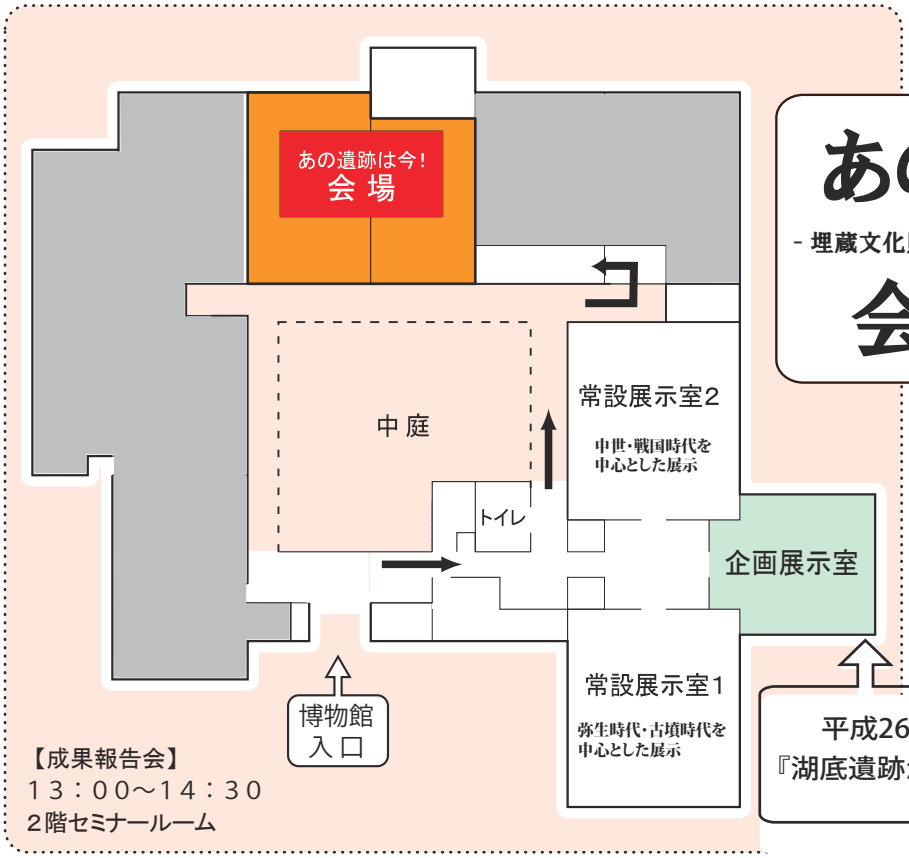
そのほか、屏風に使われたと見られる鋲（びょう）、鉄製の武具では、鎧（よろい）などの側面に取り付けられる脇板、鞐（こはぜ）は甲冑の肩上と胸板をつなぐ紐などに付けられた仕掛けです。

これらの金具は、いずれも装飾性に富み、押縁の魚々子文様や亀形銅製品の手足の鱗文様などは、当時の職人の冴えた技を見せています。

あの遺跡は今!

- 埋蔵文化財整理調査成果中間報告会 - part19

会場案内図



平成26年(第49回)夏季企画展
『湖底遺跡が語る湖国二万年の歴史』

夏のイベントのご紹介

月　日	時　間	イベント内容		定員	場　所
7月19日（土）～ 8月31日（日）	9時00分～17時00分	平成26年（第49回）企画展 『湖底遺跡が語る湖国二万年の歴史』	展示		安土城考古博物館 企画展示室
8月9日（土）	13時30分～	企画展関連講座 「生業と社会の変革（仮）」	講座	140名	安土城考古博物館 ２Ｆセミナールーム
8月23日（土）	13時30分～	企画展関連講座 「港・城・祈り（仮）」	講座	140名	安土城考古博物館 ２Ｆセミナールーム
8月30日（土）	13時30分～	企画展関連講座 「自然災害と再生の足跡（仮）」	講座	140名	安土城考古博物館 ２Ｆセミナールーム
8月4日（月）～ 10月5日（日）	9時00分～17時00分	連続企画展『海と洋を結ぶ湖』 ②命を支えた海の幸	展示		安土城考古博物館 第１常設展示室
7月8日（火）～ 10月13日（月祝）	9時00分～17時00分	連続企画展『海と洋を結ぶ湖』 ③海の船・湖の船	展示		安土城考古博物館 第２常設展示室
7月19日（土）～ 8月31日（日）	9時00分～17時00分	レトロ・レトロの展覧会	展示 体験		滋賀県埋蔵文化財センター